

超有識者
場外ヒアリング

[63]

文化芸術編



絹谷 幸二 先生 東京芸術大学名誉教授、日本芸術院会員（文化功労者）

(写真左) KINUTANI Koji

1943年奈良県生まれ。東京芸術大学美術学部卒、卒業制作で大橋賞受賞。ヴェネツィア・アカデミアに留学、アフレスコ古典技法の現代的表現を修得。安井賞、日本芸術大賞、毎日芸術賞、日本芸術院賞等を受賞、2001年に芸術院会員となる。東京芸術大学教授、大阪芸術大学教授として後進の指導に当たるとともに、「絹谷幸二賞」を設立して若手芸術家を支援。文化庁主催の「子供 夢・アート・アカデミー」にも携わる。2014年に文化功労者顕彰、2015年日本放送協会放送文化賞受賞。2016年12月「絹谷幸二 天空美術館」が開設。

神田 真人 Kanda Masato 金融庁参事官

東京大学法学部卒業、オックスフォード大学経済学修士 (M.Phil)。世界銀行審議役、財務省主計局主査（運輸、郵政担当を歴任）、国際局為替市場課補佐、大臣官房秘書課企画官、世界銀行理事代理、主計局給与共済課長、主計官（文部科学、経済産業、環境、司法・警察、財務担当を歴任）、国際局開発政策課長、同総務課長等を経て現職。OECDコーポレートガバナンス委員会議長等を兼務。著書に「国際金融のフロンティア」、「超有識者達の洞察と視座」、「強い文教、強い科学技術に向けて」、「世界銀行超活用序説」等。

▶**神田参事官（以下、神田）** 本日はご多忙のところ、ご自宅にお邪魔申し上げ、誠に恐縮に存じます。また、先日も栄えある第9回絹谷幸二賞贈呈式にお招き頂き、大変有難うございました。西村さんの初々しきは素敵でしたし、女性で外国人の受賞も初めてで、素晴らしい快挙です。先生には以前より、貴重なお話を拝聴させて頂いてまいりましたが、今日は、美術から世界観まで幅広く読者に御高見を共有頂ければ幸いです。

独自の世界の創造

▶**神田** 先生の『きらきら渋谷』は地下鉄渋谷駅の13a出口なので、自分の家路の導線ではないのですが、眺めていると元気が出るため、時々、宴会のあと、寄り道してタダ（すみません）で拝観させて頂いています。ここに“SHIBUYA”だけでなく、「忠犬」も書きこまれています。忠犬の文字を見る度、何もわざわざ書かなくてもと思いつつ、悪戯っぽくて楽しくなります。

さて、『チェスキー二氏の肖像』の“Yes or No”、『自家像・夢』の「色即是空」、『アンジェラと蒼い空Ⅱ』の“Avanti popolo”など、先生の聖書や経文、歌の挿入は極めて特徴的です。『アンセルモ氏の肖像』のような言葉にならない叫びによる内面の崩壊の示唆はともかく、直截に有意な言葉を書き込まれることは、概念も絵で表現すべきという伝統に反しかねない一方、寧ろ、絵巻物のように絵と文字は元来、一体であったという考えもあります。実際、マルティニの『受胎告知』にも聖ガブリエルの「恵まれし女よ、おめでとう。主があなたとともにおられます」なる告知が刻まれているところ、先生は、この絵画と文字の関係、そして自らの実践について、どう考えておられますか。

▶**絹谷先生（以下、絹谷）** 絵の機能としては、まず、見て楽しむことで、幸せ感を充実させるというのが一つです。これに加え、もう一方の柱と

して、絵で指し示して知らしめるといった、伝達性があると思います。特にヨーロッパの場合、或いは古代の場合、文盲といえますか、言葉が通じない外国の方も、沢山いたわけです。そうすると、絵で気持ちを伝達するということにもなります。それから、私共人類が言葉を持ったという点は、他の動物達と違ったところですが、絵でも、そういうことが言えます。両者は、人の心を震撼させる上で、不可欠なものですので、絵の中に言葉が、あるいは、アルファベットがあっても、差支えないのではないかと思っております。ご指摘の通り、かつて天使ガブリエラが受胎告知をするときに、言葉が口から出ておりましたし、京都には、阿闍梨さんが説教されている、口元から仏様が立体になって出ている像もあるわけです。

それから漢字自体が実は絵なのです。例えば「幸二」の「幸」という字は、土を書いて、ここにちょんちょんとあり、そして下に棒みたいのがありますが、これはサスマタなのですね。最近小学校などにも置かれておりますけども、悪漢が入ってきますと、そのサスマタで捕まえるのです。そうすると、捕まえられなければ幸せと、こういう意味があるわけです。あるいは「武士」の「武」という字があります。この棒は牛が引つ張る棒なのであり、跳ねているところが鉞なのです。鉞で田畑を耕せば、食料が満足にとれて、戦いが止まるといった意味合いもあります。又、まさに農民が鉞を持って反乱すると、これを止めるためには武力がいる、というまちがったとらえかたもあります。そういった風に言葉自体がまず、絵からきているということですから、絵も字も別々のものではないということなのですね。そこで、私は、そういう字を絵の中に取り込ませてきたのですが、若い頃は、漫画だといわれたこともありました。でも、そのおかげで、私の後の世代の現代作家達が、新しいジャンルを切り開いているのです。絵のもっている進取の気があったから、絵の中に言葉を書かせて頂いたと、こういうことなのですね。

▶**神田** 言葉には多くの概念が宿っており、また、絵は見るものの想像力を遅くさせます。と

ころが、IT革命で便利になった分、テレビ普及で、小説を読んで空想する楽しみと想像力を鍛える機会が激減し、ネット急拡大により、多元的で深度のある思考能力を喪失したり、断片的なバーチャルの世界に閉じこもりかねないリスクが高まっています。

また、先生は、以前、近代絵画は哲学を併せ持つなど、表面的な視覚を超え、人間の深層心理をも穿つ巨大な領域へ進歩したと観察されました。他方、私には、音楽が哲学を失ってリズム感だけとなり、映画も興行成績を求めて大衆に媚びるよう結論まで変える思想のない時代となり、IT化で知的作業まで機械に頼って益々、痴呆化が進行し、バーチャルと現実の区別も判らなくなるかもしれないような危惧を感じます。

先生は、情報革命の美術、ひいては人類への影響をどうみておられますか。

▷**絹谷** 確かに現代文明はいろいろな意味で、便利にはなってきたとは思いますが、やはり最後に残るのは、石に刻んだ楔文字だろうと思います。流行と不易というものがあり、確かにそういうことも大切ですし、これからますますコンピュータの世界が広がっていくと思います。その一方で、石に穿たれた楔形文字や、フレスコ画のような壁に描かれた絵、そういった人間として、生物として動物として、何ら変わらないものも同時に細胞のうちに古代からずっと持ってきているわけですね。ですから、片方だけ偏重しますと、少し重しがとれて浮いた世界に入っていくのではないかと思います。人間の本質とは何なのだろうか、自然と人間とのかかわりはどうあるべきかといった太古の人たちが抱いた想い、そういったものも繰り返し、私達の手先や血筋、体の中に充填していかないと、形骸だけが歩いているというような、軽いものになってしまいかねません。例えば、コンピュータが故障したらどうなるのだろうか、電気が切れたらどうなるのだろうか、今までの情報が一挙に消滅することも考えられます。そうした時に、果たして火打ち石があったと気づく人がいるかなと思います。コンピュータのチップ

など、手で相手方に渡しただけで静電気が流れ、内容が消えてしまう事があります。

奈良の維摩さんの教えなのですが、私は、相反する概念はそれぞれ別々ではない、一つのものの部分なのだという事を肝に銘じないといけないと考えております。新しいことと古いこと、或いは甘い辛い、男と女、水と油といった、相反する概念は、私達の体の中に水と油があるように、或いは遺伝子の中に過去と未来があるように、その二つは全く別物ではないと思います。善と悪もそうです。私達の心の中にも、明るい気持ちと暗い気持ちが同居しており、悪い気持は身体の細胞を破壊し、命を縮めますので、明るく生活しなければならぬでしょう。そういうものを双眼でとらえていかないといけないのです。

▶**神田** 先生はアフレスコの第一人者でいらっしゃると思いますが、これについて。有難くご恵贈頂いた『絹谷幸二自伝』の中で、漆喰が生乾きの間のジョルナータ（一日分）に取り掛かっている間は席も立てない過酷な創作環境を紹介されています。まさに、体力、気力が必要だったために、楽な油彩画に流れてしまったのでしょうか。運輸手段の発達で足腰が衰退してしまったように、技術革新の中で、肉体的には怠惰に向かう合理的な進化の過程ともいえます。

しかし、先生は、忘れられた技術や感性の中にこそ、次の創造につながる道があると信じ、極められました。『群れない生き方』の中で、石灰に始まり、石灰に帰っていく炭酸ガスの輪廻の話をされ、その思想的ロマンは大いに共感するのですが、アフレスコの芸術の創造との関係について、もう少し敷衍してください。

▷**絹谷** 簡単に描いて、絵さえできればいいということであれば、確かにフレスコ画は労力がかかるだとか、高いところに登って足場を作って、その現場で書かなければいけないという大変なことがあります。しかしながら、書くという喜びの中には、それ以上のことがあるわけです。出来上がった絵だけであれば、アクリルで書こうが、吹き

付けで書こうが、印刷しようが、色々と方法はありますが。

フレスコ画がもっている大切なことに、炭酸カルシウム (CaCO_3) というものがあります。フレスコ画の壁の材料である石灰岩 (CaCO_3) の中には、今、一番問題になっている炭酸ガス (CO_2) が入っています。石灰岩に炭酸ガス (CO_2) がいない状態は生石灰 (CaO) ですが、それに水 (H_2O) がかかりますと、消石灰 (Ca(OH)_2) になります。その消石灰と砂を混ぜて壁に塗ります。そうすると、水が外に出て行って、空気中の炭酸ガスを吸って、もとの石灰岩に戻ります。鍾乳洞とか私達の祖先が住んだ洞窟は石灰岩なのですが、その中で、ポタポタと水が落ちていき、鍾乳石がだんだんと成長していきますね。そして石灰岩の中にある、無色透明なものがどんどん溜まっていくわけなのです。アルタミラの壁画にもあるように、私達人類がそこに住んでいたことを考えると、石灰岩の洞窟こそが、ひょっとすれば私たちの母体であったのではないだろうかと思われるぐらいのものなのですね。その洞窟の石を焼いて、生石灰にしてから、水をかけて消石灰にし、それを砂と混ぜて壁に塗って絵を描いたということなのですが、絵を描きますと鍾乳石からポタポタ落ちてきたような無色透明なもの、つまり、アニドリデカルボニカ（無水炭酸塩）ができて、絵の具を閉じ込めてしまうのですよ。もう見事なものなのですが、それが乾ききってしまいますと、透明の被膜の上に絵の具を載せても、絵の具には接着剤が入っておりませんので、だーっと落ちるわけなのです。ところが、乾く途中であれば、空気中の炭酸ガスをずっと吸っておりますので、カルボニカが顔料の上部に出てフィックスします。そして、炭酸ガスを吸って石になる、その刹那に顔料が壁の中に入って行くのです。つまり、非常に科学的なものなのです。そういったことを大昔の人は知っていたということなのですね。

しかもその石が、今世界中で問題になっている炭酸ガスを抱えてもってくれているということは、絵を描くということ以上に楽しいことなのです。そういう瞬間を共有できて、壁と語りあえる

と、そこで自分の吐いた息も吸っていってくれる、石も息をしているのだと、こういうドラマは簡易的で便利な世界では味わえない感動なのです。これは、絵を描いていながら、地球と、あるいは宇宙と語れるといいますか、あるいは生命の起源について想いをめぐらすことができるというか、素晴らしい世界が絵画にあるわけです。そういうところで探検ができるということは、私にとって、かけがえのない喜びであり、フレスコ画を描く動機なのですね。

▶**神田** 『群れない生き方』では、色面と色面が接するところに線を入れる画風を小磯良平先生に「つまらん」といわれながらも、貫徹され、御自身固有の画風の確立されたことを述懐されています。線というと、『絹谷幸二自伝』の中で、国立ヴェネツィア東洋美術館において日本の線の文化を発見されたと記しています。線に自然への畏敬の心が残されているとも仰っていますが、線の意義と絵への導入の考え方について、ご教示ください。

▶**絹谷** 日本は古代から明治維新ぐらまで連続と、続く線で絵を描いていました。ところが、西洋美術と出会って、線のほかに、調子（明暗）で絵を描くとか、塊で絵を描くとか、いろいろな要素が入ってきたわけですが、例えばお子様や古代の方にもし鉛筆を渡したら、調子ではなかなか絵は描けないわけです。調子の度合とかを色々と測ってやらなきゃいけないものですから、勢いよく線でこうびゅつと描いてしまうことになります。ところが、人体には、実は線というものはないので、輪郭線という線は考えればありますけれども、そのこと自体が非常に抽象的なのですね。エジプトの絵を見ましても、アルタミラの画を見ましても、人間の初心がずっと近代まで続いてきたのが、日本の線だということなのです。明治維新になって、西洋のものも学ばなくてははいけないということで、線をなくすといいますか、なくさないとそっくりな絵は描けないという感じになりました。調子など色々と私共が芸大で習ったような

ことを取り入れていったのです。ルネサンスの頃、エジプトやギリシャから西洋人達がそれまで続けていた線の画をなくすわけですね。そのせいで明暗の度合を測って描かなければならない。例えば、線で人間を書くと、袋みたいになります。東洋の人はどちらかというと人間全体を見てしまうという感じなのですね。ところが、ヨーロッパの絵画の場合には、表にできる輪郭線ではなしに、骨の傾きを書き、それに肉をつけていきます。これには大変良い点もあり、例えば、西洋医学の場合、首や頭がこうなっていて、鎖骨がこうなっていて、頭のところを外すことができるのではないかということで、脳外科などで、色々と部分的に外せるようになり、近代医学を発達させたと思います。

これに対し、人間は一つの袋なのだという考え方、これが漢方とか東洋医学の考え方になるわけです。例えば、足の爪の裏、指の裏をいろいろ刺激するとそれは脳につながっているのだとか、人間の顔色というものは、血液が上にのぼっていくと、赤くなるなど、人間というものを全体としてみるような学問に、線の思想が入っています。しかしながら、部分的に外すことができないから、脳外科のように分けて捉えることができなくなるため、古いとか成長がないものと捉えられもするわけです。しかし、更に時代が進めば、そういうロボットの考え方が人間にとっていいのかどうかという問題も起こってくるのではないかと思います。人間の輪郭線は、外側にもありますが、口から肛門にいたる、胃腸（消化器官）ともいうのも実は内側の外側といえます。例えば、顔色が悪い人を見た場合、胃も同じことになっているのではないかなという風にも推察できますし、お酒も飲んでいないのに、顔がぱーっと蒸気している人は、血液の巡りがおかしいのかもしれない。例えばこの手を下にすると、下にあると赤いのですけど、これを上にもっていきますと、だんだん白くなっていきますね。僅かこうただけで、血液の動きが変わっていきます。そういった線で導かれていくということ、生物としての初心といったものも現代医学に含めていったら、やはり双眼

でみるということで、新しい開拓ができるのではないかと思うのです。

従って、私が、現代絵画に線を取り戻したのは、ピカソやマチス、あるいはルソーが、「自然に帰れ」といって、アフリカ美術に傾倒したのと同じように、人間の初心を訪ねる、生物としての人間の喜びを体験するといったところに想いを巡らし、芸大の西洋美術では習わなかった、日本が明治維新頃までずっと持っていた初心の喜び、大切さを復活させたいと思ったのです。これも少しフレスコ画と共通しているところなのですから、それでいて、あまり古いところばかりでなく、気持ちとしては新しいことがやりたいなという、そういう維摩経の影響だとも思いますが、双眼で見るという世界を線の面でもやっているわけなのです。

日本芸術の将来

▶**神田** 先生は、上野桜木のアトリエを含め、東京芸大時代のお話もよくされていますが、私は20代、芸大に近い根津に住んでいたのですが、才能に恵まれ努力を重ねて芸大に入ったものの苦勞されている学生さんをよく見てきました。当時は未だ学生がかなり多様だった気がするのですが、現下の東京一極集中のもと、私の母校も東京の地方大学化し、ダイナミズムがなくなっていることを危惧します。そこで、留学生や外国人教員を増やす運動をしているのですが、先生は現在、大阪芸大の先生もされているところ、日本の芸術大学の多様性、開放性、競争性は過去と比べ、どんな状況にあるのでしょうか。

▷**絹谷** 他の分野でもそうだと思いますが、一極集中で、東京にニュース・ソースが集まっていることは、集積の有利さもあり、一つの大きなエネルギーになっているので、それはそれでいいと思うのです。それと同時にもう少し心を砕いていかなければならないのは、各地方のもっている独自のエネルギーも忘れてはいけないうのではないかとことです。例えば、博多祇園山笠は、男が禪をして、夜中に水をぶっかけられて、走りま

くるような山笠なのですが、京都では、雅やかな祇園山笠、子供たちがチンチンと太鼓をたたいて、練り歩くという、優雅なエスプリの効いた世界でもあるわけなのです。絵も同じことが言えると思います。東京は非常にエスプリがきいていますが、地方では、例えば、棟方志功さんのような非常に原始的で土着した版画のようなものもあります。都会的なものと、そういった土着的な地方のエネルギーはどちらが有利だということはいえないと思います。博多祇園山笠の場合は、あの辺は、昔から、非常に危ないところだったので、外的な侵入などに対して、若い元気な男を育てておかなければならないということもあったのでしょう。一方で、京都の場合は、山に囲まれていて安全であるという安心感が、また、100年の都の蓄積がお祭りの中に現れていると思います。両者をどちらが良いかは言えませんが、絵画の場合、都会で生まれたものの中には、外国の真似をしている模倣品も多く、感動を呼び起こさないということもあるのです。ここに、都会の弱さ、脆弱さも兼ね備えていると思います。

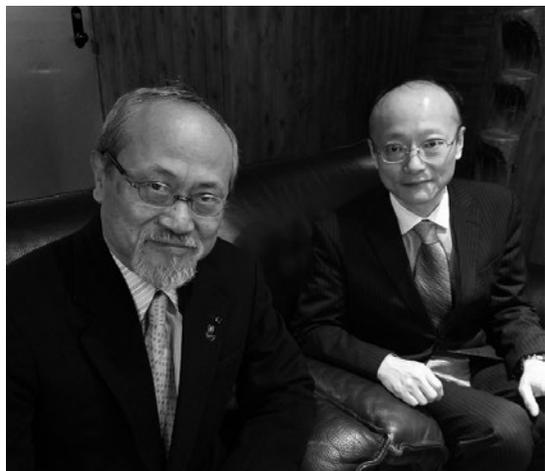
また、私は「子供 夢・アート・アカデミー」で全国津々浦々まわっていますが、地方の子供たちは真面目だし、無骨だけれども、継続性があるのに対し、都会の子供たちを見ますと、洒落て、生意気なことをいいますけれども、どこか心の内に影を宿していたりします。都会の中に揉まれた苦しさとか、自然と共に生きていない余裕のなさといったものを露呈します。

絵もそうで、片方だけに偏っては、脆弱で、受けを狙うだけのものになってしまう。ですから、日本の絵画がこれから、世界にうってでるためには、ドメスティックなものやインターナショナルなものを踏まえつつ、やはり、日本人の心の中にある、幸せはどのようなものなのか、という想いを、そのまま鏡のように絵にうつしていけばいいのではないかなと思います。それが抽象的になろうが具象的になろうが、どんなジャンルでもいいと思いますが、まず鍛えなければならないのは、都会に住んでいようが田舎にいようが、人間の心、自然や動物、あるいは炭酸ガ

ス、そういったものについてどう考えるかということだと思います。そういうことを思っ、そのまま、鏡のように絵に写していけばいいのです。今うけるにはどうしたらいいかとか、今この絵を売るにはどうしたらいいかとか、それも非常に大切なことなのですが、あまりそういう余計なことを考えておりますと、絵描き家になってしまう可能性があります。その前に、人間になっていけばいいのではないかなと思います。植物とか自然といったところから発想した絵は強いですね。

▶**神田** 私も門外漢ながら関心をもっていた独立美術協会について、『絹谷幸二自伝』等で触られています。フランス美術からの独立、日本油絵の独立、フォービズムを標榜し、具象絵画の拠点たる機能、様々なミッションがいられていますが、先生は独立美術協会のミッションをどう定義づけられていますか。

▶**絹谷** 独立美術協会は、日本人の絵を描きたいということなのですね。だけど絵を描くには、フランスやいろいろなところで勉強しなければならなかったところ、ちょうどその頃に戦争があり、油絵の世界が、少し辛い時期もあったのです。そういう中で新表現主義や野獸派が生まれました。当時は欧米列強の進歩の度合が早かったものから、追いつけ追い越せと先輩たちは切磋琢磨したのだと思うのですが、科学やそういう分野と同じように、独立美術協会の作家達も、そういう流れにのって、あまり進歩のないものでは東洋の寝りに入っては戦後の日本発展はない、と考えると同時に、日本人のアイデンティティを絵に塗りこめていきたいという想いが強かったと思うのです。私もイタリアに留学しましたが、イタリアは今でこそ沈滞しておりますが、百年位前までは、ヨーロッパの人たちもみんなイタリアに留学していて、西洋の西洋たるころだったので。アメリカも元はイギリスの人達、そのイギリスの人達も元ローマ人といた趣がありまして、私は、ぱっとみただけで、アメリカはイタリアを大きくしたような一つの相似形なのだなという想



いがしました。ベニスの大運河とジュデッカ運河が真ん中であって、ニューヨークと同じだなと、摩天楼が教会の鐘楼にかわっているだけなのだなと思ったのです。やっていることも商業活動で同じです。ヨーロッパに在外研修でいかせていただいたことがあります、大抵むこうに行くと浮かれる人が多いのです。でも、私は奈良で生まれたせいか、仏様の教えとか素晴らしい世界を見ているものから、ミロのビーナスをみても、あちらの合理性に出合っても、余裕がありましたね。私たちは全然、戦争に負けたからといって、人間として何も負けていないのだという気持ちがありました。

▶**神田** 私は日本の伝統芸術も大切にしておりますが、洋画は外来の基本に服して戦って、世界の土俵で高く評価されており、洋楽やスポーツ同様、日本民族の誇りであり、国際社会で名誉ある地位を占めることに貢献していると思います。その成功には日本独自の要素との結婚があると思うのですが、先生は、地形と気候が複雑に入り組むことから生じた、人間も自然の一部という自然観を日本、アジアの特徴とされています。ただ、多少、地中海性乃至西岸海洋性気候は温厚ではあるものの、欧州にも自然の多様な恵みがあります。寧ろ厳しい環境の中東で生まれた一神教が抽象性の要因とも思われるのですがいかがでしょうか。

▷**絹谷** その通りだと思います。一神教と多神教の違いは大きく、これは大命題です。一神教の聖書の中に、“You must say simply, Yes or No”という記述があります。あなたはキリスト教を信じるかどうかをYesかNoかで言わないといけません。コーヒー飲むか、紅茶を飲むかを先にYesかNoかで言わないといけません。どうしようかな、ジュースがいいかなといった曖昧な答えは、許されない、これが私の一番、向こうに行きました時のショックでしたね。維摩さんがおっしゃっているのは、相反するものさえも一つのもの部分であり、例えば善と悪ですら別々のものではないということなのですが、そういうものは一神教の世界では決して許されません。でも私は次の世紀にこういう一神教の世界で、果たして、幸せになれるかどうかというのがいつも頭の中にあります。今起こっているいざこざをみますと、私どもが神仏合体とかそういうことをやってきて、キリストも認め、イスラムも認めているというこの社会こそが僕はユートピアでないかなと思うのです。信教の自由の中で、幸せに暮らそうとしているこの世界、それから清潔さにおいても、時間の正確さにおいても勤勉さにおいても、あらゆる面で、世界に冠たるものがあると思います。素晴らしい塩梅の配分を財務省でやっておられるということも、犯罪のなさ、安全な国という点でも、食べ物はおいしくて、比較的他の国に比べたら平等であるという点とかね。あらゆる点において、わが国は非常に磨きあげてきていると思うのですね。その根幹の中には、やはり、一神教ではない、胸襟を開いている世界があるのではないかなという気持ちがありますし、それはやはり日本の国の風景が、水が、空気が美しいということが心に届いているからなのではないかなと思うのですね。

▶**神田** 先日、お招き頂きました絹谷幸二賞贈呈式では、受賞された西村有さんとサブリーナ・ホークさんの作品の素晴らしさはもとより、先生も仰った通り、その初々しさに感動を覚えた次第です。先生は、絹谷幸二賞について、終了してしまった安井賞への恩返しとして若い人に冒険できる

ような機会を与えるといったことを目的に、費用は出すが選考に口を一切出さないルールで始めたことと仰っていました。

この賞は規格外の絵が多いといわれ、絵画の進化に素晴らしいことだと思いますが、規格外だからこそ、安易な基準もなく、選考が困難だと推測されます。選考の方法はいかなるものか、また、それも具体的には選考委員に任せているのであれば、選考委員の選び方はどのようにされておられますか。

更に何うならば、そもそも、芸術の世界でいかに評価というものが可能なのか。つまり、芸術では皆と同じ答えを出すことは間違いです。先生は其中で断固として信念を曲げずに闘ってこれ成功された。しかし、ひとつの答えがない時に誰がどのように芸術家ひとりひとりの魂を評価することが可能になるのでしょうか。

▷**絹谷** 私は、全て毎日新聞社さんにお任せきりで、評価をされる方を選ぶこともしていないのです。評価する人たちも3年ごとくらいに変わっています。それから、評価という点なのですが、絵の世界が他と違うところは、1+1は2という皆と同じ答えを出したら間違いということ。それにもかかわらず、皆と同じような絵を書きたい、突出したくないという気持ちもあるわけなのです。しかし、そうであると、この絵とこの絵がよく似た同じ絵であれば、この絵は評価されても、それではこっちの絵は悪いのかというと、この絵とこの絵は、同じような絵なのだから、この絵も評価されてしかるべきなのということになり、そういう絵が山ほどありますから、選ばれた絵が皆同じ絵になってしまいます。皆と同じというのがいいという尺度では測れない。また逆に、1+1=5という絵があった場合、皆と一緒にじゃないので、特殊なのですが、そういう特殊な絵に対して賞を与えたらいいのか、みんなとおんなじような絵を描いている人の中で、うまいだけを選べばいいのか、こういうことになってきます。審査の人達の哲学とか好みとかは色々あってその基準は変わってくるのです。入学試験で、もし、

私達は、1+1は3とか書いているいわば規格外の絵をとったとしますね。すると、そういう絵も山ほどあるために、不公平感がでてくるので、勢い、上手な絵を基準にしがちなのです。上手な絵の中に、ある良さ、他にはない良さが入っているものを次の段階ではセレクトしていくという風な形になり、天才を入選させることは難しくなります。ところが、絹谷賞のような選抜賞では、評論家の先生とか新聞記者の方たちが、春のセンバツ高校野球と同じように、その前年の展覧会を見て、この人を推薦したいということで応募してくるわけで、公募の時のように、自分が出したいから出せるという形式じゃないものですから、その1点の絵だけに対して評価するというものでもないのです。展覧会の様子を見て先生方が、推薦することになりますので、最初からレベルが高く、そういう中での戦いになります。そういった時に、私が選ぶ場合は、パッと見て誰が見てもこの絵が一等だというのがバーンとくるときがあるのですね。それがやはり、時代をとらえていたり、あるいは、時代をこえていたり、非常に丹念に描かれているとか、その人の性格まで、あらゆる要素が、絵を見た3分くらいで全部わかるわけです。そういうのがでてきた時は選ぶ立場としては、非常に楽なのです。ところが、そういう天才的な絵がなかった場合は苦勞しますね。そういう場合は、運もあるでしょうし、時の勢いっていうものもある。絹谷賞の場合には、私がいなくても入ることですし、私がいなくても入るということもあります。そういうことで、絹谷賞は、他力本願というか、いろいろな方の感性で時代をとらえてほしいという風に考えております。

▶**神田** 長野五輪公式ポスターになった先生の『銀嶺の女神』は当時の権力者、サラマンチIOC会長に売ってほしいといわれたのにお断りになったことで有名です。さて、クーベルタン男爵がオリンピックの趣旨としてスポーツと芸術の祭典を掲げたことを先生も紹介されていますが、実際、1912年のストックホルムオリンピックから1948年のロンドンオリンピックまで芸術競技が採用さ

れ、日本人もメダルを取っていました。インバウンド旅行のリピーターを増やすためにも、2020東京はスポーツを軸にしつつも文化芸術、ひいては日本人や日本の自然まで知って頂きたいのですが、まだ、更なる広がりや余地があると思います。芸術作品があるところには原爆が落ちないと仰いましたが、私も、芸術文化で尊敬されることがこの上ない安全保障とも考えています。先生の2020文化戦略を御開陳下さい。

▶**絹谷** 来年、パリでジャパネスク展をやるのですが、日本でこそやるべきではと思います。それとは別にオリンピックの年には、東京で国際展があつていいと思います。やはり、折角日本にあらゆる国の報道陣がきている時ですので、食の面同様、わが国の良さを世界に知らしめていくことが私たちのリスクマネジメントになると思います。我々は、どうしても、自分の宣伝をするのが恥ずかしいというところがあつて、目立たないようにしようという精神があるのですが、もう少し国として、日本の作家をどんどん日当たりのよいところに出して頂きたいという思いがします。なお、オリンピックとは別なのですが、8月22日から10月15日まで京都国立近代美術館で個展をやらせて頂きます。そして、来年是北京でも個展を計画しています。

▶**神田** 先生が尽力されている「子供 夢・アート・アカデミー」に感謝しております。特に、被災地児童に元気と将来の糧を与えてくださっているといます。絵画を通じて、イメージが形になること、反対の色や意見を取り入れながら個性を育み、調和を尊重することを学べることは貴重な体験です。この活動の手応えと将来の展望や期待についてお聞かせください。

▶**絹谷** 日本を支えていくのは、我々の同級生・同窓ではなくて、子供達だと思ふのですね。もっと言えば、まだ生まれていない子供たちかもしれません。私は美術学校でずっと教えていますが、これはみんな同業者を教えているわけです。一方

で、「子供 夢・アート・アカデミー」の場合は、その後自衛官になる子供がいるかもしれないし、財務省の主計官になる子供がいるかもしれないし、色々な可能性のある子供たちがいるわけです。その子供たちに絵を描いたあの時は楽しかったなあと、今後色々苦しいことも出てくるでしょうけども、絵の世界、こんな世界があるのだったことを小さい子供たちに教えあげればいいと思うのです。例えば、勉強ができなかったり、いじめ等があったりすると、ちょっと辛い気持ちになる子供もいるのだけど、それがこつこつとひとりで絵を描いている世界に入れば、別段皆と仲良くしなくても、楽しみがあるのだよってということが植えつけられればいいかなと思います。僕が教えにいくと学校の先生が嫉妬することがあります。体育館にいる時に僕が入ってくると、途端に、何も言っていないのに、その場の雰囲気が一瞬と緩むのですよ。ところが先生達が入ってくる時は皆難しい顔をしています。どこが違うかという、先生はしなめ面して入ってきますが、僕が入って行く時は、入る前にニコニコって顔をしておいて、入っていき、目と目が合う子供たちにニコニコニコってするのです。それだけなのです。そして、誰でも描けるという絵を描かすのです。まず、赤い色の中に、少し緑を入れなさいというて教える時に、「君たち、お善哉作る時に砂糖の外に何入れるの」と聞きます。そうすると、お餅、とか色々な答えが出ますが、塩、っていう生徒の中にはいます。「甘いものを作る時に塩をちょっと入れるでしょ」と説明し、今度は「カレーライスを作る時に、何入れる」ってききます。肉、といった答えが出ますが、「ハウス何とかっていうだろう。」と私が聞いかけると、バーモントカレー、というのが出てくるので、「そう、それは何が入っている」ってきくと、「りんごとはちみつ」と返ってくる。そこで、「辛いものを食べる時に反対のものをちょっと入れるでしょ、甘いものを作る時に反対のものをちょっと入れるでしょ。これが、絵の具を混ぜる時のコツなのだよ」と言っ、僕のヨーロッパで勉強してきた秘宝を教え

るわけです。「それじゃあ、その色作ってみよう」といって、皆で作って、「そんじゃどんな色作ったか、紙につけてみてみよう」と聞いかける。「チューブから出したままの生の赤をつけたら、ここにいるみなさんの赤が全部同じ色になるでしょ。そうじゃなくて、自分だけの美味しい赤を作ってくれ、黄色をいれてもいい、でもちょっと反対の緑も入れようね。でも同じ分量入れたらダメだよ、おんなじ分量入れたら甘いのか辛いのかわからなくなるでしょう」という。だから少しだけ、混ぜる練習をさせるのです。それで、実際に混ぜてみると、確かに色が、生の色ではなくって、本当に味わい深い上品な赤になるのです。

見る勉強、観察する勉強もします。「男の子こっちに並んで、女の子こっちに並んでにらめっこしよう。前の人の顔が下駄型なのか、狐型なのか、真ん丸なのか1分間のうちに覚えなさい。書き出したら顔を見られないからね」と言っにらめっこします。「狐の目か狸の目か、相手の特徴をとにかくみなさい」と教えます。そして、「前の人の顔を線でそこに描きなさい」とやると、誰でも、もの凄く面白い絵ができるわけです。線を描いてから普通色塗るわけなのですが、これはそうではない。ぐちゃぐちゃになっている色の中に線で絵を描く。描き終えたら、「これはピカソだ」などと誉めまくりです。そういうことをすると、どんな下手な人でもね、絵になるのです。色を先描くだけで絵になるのです。だから発想の転換というものも教えているわけです。

▶**神田** 大沼暎夫さんが先生を芸大に教員として呼び戻されたこと仰っています。

最初に日大美術学部で教鞭を取られたと思いますが、先生の授業手法に関心があります。ご自身の先生方は流石に芸術の大家、個性豊かで、何でも「いいですね」だったり、何でも「それ、つまらんわ」だったり、意味不明の指導だったり、無言だったり、それぞれだったそうですが、先生ご自身はどのような指導をされているのでしょうか。

▷**絹谷** 私も諸先輩の真似をして、忙しい先生を装っておりますので、あまり教えないのです。うちの娘や息子にもそうなのですが、芸術方面へ進んでいるのにも関わらず、教えない教えをしております。今は、百科事典をみても、もう5年たてば、もう遅いって時代なのです。ただし、海や山に行けとか、魚釣りしろとか、そうしたとんでもないことは教えています。それから、芸術にかまけて、もっと面白い、子供が創作するようなことを忘れちゃいけないということをごちゃごちゃでちらっと言ったりはします。それから、私が芸大に通っていた頃に、東大のフランス文学の市原豊太先生から教わったことなのですが、“ARS VITA ESTA, VITA ARS ESTA”（「人生は芸術、芸術は人生」）という言葉があります。芸大生の場合は、芸術至上主義という人が多いです。しかし、それももちろんやらなければならないのだけれども、その反対にある、生活が芸術であるということも忘れてはいけないってことを私は教えますね。

▶**神田** 下世話な話で恐縮ですが、美術品マーケットについて。この世界は組織犯罪や政治裏献金の舞台ともなり、私の金融規制の仕事の関係でも、テロ資金対策の対象としてG7やFATFでも議論されることがあります。日本の絵画市場は、シンワアートオークションの近代美術オークションインデックスによれば、金融異次元緩和が齎したデフレ期待脱却、円安、株高局面でも下落を続けているようです。本来、インフレヘッジとしても有効だとされているのですが、相続による出品増といった需給ギャップや、中国マネーの取り込みも反腐敗闘争で奏功しないといった要因が分析されているところです。先生は日本の美術品マーケットをどう見ておられますか。

▷**絹谷** この間、東京証券取引所の斎藤元社長とも話をしたのですけれども、日本の場合は「まけてくれ」っていうのがあるのですよ。日本は、財務省がしっかりしているので、円とかお札というものに、非常に信頼感がありますが、ヨーロッパ

の場合は、私共が留学していた時は、イタリアリラっていうのはどうなるかわからないと考えて、みな、ドイツマルクやスイスフランに換えていました。今はユーロになりましたから、昔とは事情が違いますが、概ね考え方は同じだと思います。ギリシャの人もイタリアの人も自国の国債を買わず、ドイツの国債を買う。一方で、その国債だけではやや不安でもある。前世紀、ヨーロッパにおいては、百年の間に百回くらい戦争をやっていますので、自国や自国通貨というものに対して、全幅の信頼感がないのです。その逃げ道が、金であったり宝石であったり絵画であったりするわけです。

日本の場合は、主に戦後ですが、「まかりまへんか」といって、まけてもらったものを買うことがあります。それは、自分の資産を過少に評価していることになります。私達が若い頃は、オーナー社長が大勢いらっしゃったこともあってか、「絹谷さん、あなたの絵は安い、だからもっと高く言いなさい。買ってあげるから」と言われるので、1割増くらいで言うと、そう買ってもらえたのです。こうなってくると、価値というものも上り勾配になっていきます。ところが、「まかりまへんか」というのは、これで一旦低い価値のついたものが再び出てきた時は、また「まかりまへんか」の対象になってしまうので、どんどん下がってってしまうわけです。気持ちの問題なのですよ。

それから、サインを入れなければ、税金はかからない、特に相続税にもかからないという国があります。日本では、描けば描くほど、税金がかかってくる可能性がでてくる。もし子供達が売った時には、税金かけて頂いていいのですが、今は、描いたら、それをつぶす以外、売れなくても相続で税金がかかってくるので、女房からも、「あなたもう絵描くな」といわれています。美術館に寄贈するといっても、死んでから8か月以内くらいにやらないと税金がかかりますが、美術館は、倉庫がいっぱいだし、審議会も開かなければいけないから、すぐには引き取ってくれないのです。

もう一つの海外との違いは、日本の場合、新し

いもの好きというか、今描いた絵が一番高いという感じなので、作品の画家が死んだら安くなりますが、ヨーロッパでは、逆に、若い時の絵とか、死んでからでも絵の値段はあがるのです。流通面でもそうで、外国の人は例えば若冲の絵でも、最初に買った時も若冲の絵だと思って買ってないのです。誰の絵かわからないのだけど買った、好きだから買い進んでいったとなるのですが、日本の場合は少し違って、良いから買うというのが多いのです。その場合、誰がそれを証明するのかという問題があります。ヨーロッパの場合は、それが美術館だったり、博物館だったり評論家だったりしますが、こうした評価するシステムが日本にはなく、風評くらの感じなのです。だから、ニセ絵もいっぱいあるわけです。それからオークションについても、日本の場合は、要らなくなった絵を処分するための場なので、お父さんが買った絵はわからないからとオークションに出して、その結果、偽物だとか言われてタダみたいになってしまうことがある。日本には鑑定のシステムもありますが、海外では、例えばシャガールの絵の場合、鑑定家にみてもらって、もしその絵が偽物だと判断されると、その絵は鑑定機関が回収してしまうのです。没収されるリスクがあるので、危ないものを扱っていた場合、出せなくなる仕組みなのです。

私たちが学生の頃、先生「あまりたくさん絵を描いちゃいけない」と言われました。しかし、ピカソは1日に36枚絵を描き、それを365日、90歳代まで膨大な数を描いておられる。それでいて、あの値段を保っているというのは、オークションがしっかりしているからだと思います。オークションでピカソの絵は、年間1、2点しか出せず、ほかの絵は出させないので、この1、2点の絵画をピカソの絵を持っている人達が競り上げていくわけなのです。1点が2点ですから、追っていきけるわけですね。そして、オークションであがっていくことによって、何万点という絵全部の価値が急激にあがるわけです。

ひとの生き方

▶**神田** 先生は唯摩経の不二法門を引かれつつ、双眼の重要性を説いておられます。奈良出身で仏の世界の造詣が深い先生が洋画を追及されたアンビバレントな姿勢が説得力を持ちます。私は高校時代、最後の弁証法世代だったかもしれず、もともと一体であったものが一見、反語的に現象しているものを双眼が止揚させるものと理解していました。更に先生は、沢庵宗彭の「夢」を引証されつつ、人間は仏や極楽浄土を信じることで救われてきたとされつつ、他方、奇跡ともいえるこの地球こそが極楽浄土であり、死んだらおしまいと知るべき、と仰ったこともあります。若干、混乱したのですが、先生の世界観、死生観についてご教示ください。

▷**絹谷** 簡単にいえば、信じるということなのです。私は興福寺というお寺のすぐ下で生まれました。池に水をはって、ハスを植えて、魚が泳いでいる。もしあなたが極楽にいったら、こんな世界なのだよということを具現化しているのがお寺であったりするわけです。あるかないかもわからない、浄土の世界はこういうものだよ、と指し示している、あるいは、そう思い込ませているのです。死んでしまったら、信じようとしている世界はあるかどうかわからないのです。いってみれば模型みたいなものですね。

私の京都近代美術館の展覧会の題名は、「絹谷幸二 色彩とイメージの旅」です。その「イメージ」というのも、あるかないかわからない世界なのです。色彩も、私共はあると思っていますが、実はないのです。光線はあるのですが、それを私たちが見て赤だ、と思っているだけの話なのです。お坊さん達は、色即是空、色というのは形であり、形あるものは壊れるという風に言うのですけれども、私から言わせれば、色即っていうのだから、色なのです。色というものは、空であり、実はないものなのです。それを頭の中で、変えているわけなのです。色即是空、空即是色は、私の死生観になっています。

ところで、大昔、男達は、洞窟に住んでおり、

夜でないで大勢いる動物に負けるので、夜狩りに出ました。昼間寝て、夜出て行って、朝になるまでに帰ってきた夜行性だったのです。他方、女性はその洞窟の前で少し洗濯をしていたりしていたので、葉っぱの色といちごの色の見分けがついたのです。だからこそ、三原色を先に手に入れたのは女性なのです。男性に色盲が多いのは、緑と赤がわからない人がいるわけなのですが、これは色彩のない夜中働いていたことによる遺伝子のせいなのでしょう。

▶**神田** 『群れない生き方』において先生は文字通りそのような姿勢を展開されています。共感することが多く、今や既存秩序が機能不全を惹起して崩壊していく乱世、環境変化に適応する努力をすべきで、馴れ合い、思考停止の現状維持はかえってリスクが高いと思います。閉鎖的で排他的なために閉塞感を再生産する悲劇はビジネス、学界、政界どこにも蔓延しています。

特に、日本語障壁や寡占市場に守られた領域では、生き残りをかけた戦略ではなく内向的な人事派閥抗争に明け暮れ、蝸壺利益共同体まるごと歴史の藻屑として沈んでいきかねない状況も見られます。外との流動性、中の多様性が欠如しているところは、実は多様かつ開放的で貪欲に大陸を吸収して独自の文明を築いてきた日本の伝統とも異なるようにもみえますが、先生は現代日本社会をどう見ておられますか。

また、和をもって尊しとなすは当然に素晴らしいことですが、これが偽善と指摘されるのも残念です。私は80か国近く回りましたが、現代日本は、障害者といった弱者や客人、困っている人に実は冷淡で、異質なものを共通の敵にして結束しようとする態度が目立つ国のひとつに感じることがあります。これはもともと寛大さ、寛容さを誇りとした日本民族の伝統ではなく、特殊な国際環境と人口オーナス等のもと、右肩上がりか約束され、リスクアバースに処世術の要領で成功できた一時代の副産物だともいわれます。先生は日本人の本性をどのように観念されていますか。

▷**絹谷** おっしゃる通りだと思いますね。確かに、日本人は、勤勉であるし清潔であるし、時間も大切にしている。教育水準も整っている。あらゆる良いと思われることが、世界でも冠たる程だと思います。ところが、そういうことに気を遣うあまり、人間として、もっと胸襟を開いて、もっと和気あいあいと楽しむとか、指示待ちしないで、何か楽しいことを自主的にやっていくといったことができない傾向もあります。日本の場合は、イクラ状態というより、筋子状態なのです。筋子の状態では非常に磨かれていると思います。日本は、徳川300年、とても平和でしたが、鎖国をして、孤立主義を選び、また、内なる平和を保つために、むこう三軒両隣、見張り組等のシステムを導入したのです。その結果、非常に制御しやすい国民に育ったと思うのですが、反面、それがあまり過度になると、自主的に動いたり、判断するといったことができなくなり、お上から何でもしてもらえるのだ、だから自分してもらうのだというその受け身の考え方になったのではないかなと考えています。

私がこうして色彩を沢山使って絵を描くのは、それぞれの色をもってほしいと願っているからです。紫色の人もいれば、黄色の人も、赤い人もいるというような、多彩な動きをしてほしいと思うのです。例えば、わびさびというのも確かに良いことなのですが、ぬれ落ち葉になってはいけないのだと思います。唇に歌を、ちょっと土日には色彩を纏った服を着てもらいたいという気持ちがあります。奈良の都も、匂うが如く盛りだった頃は、赤い柱、はためく旗、そして外国の人で満ち溢れ、松本清張さんに言わせると、今奈良の町に来ている外国人と同じだけの人が奈良の町を歩いていたそうです。本当に開放されていたのです。そして、あの七福神でさえ、日本人は、鯛をもって竿をもっている方（恵比須神）だけで、他の6人は外国の方なのです。日本人は、海の外から色々な知恵などを吸収して、地震とか台風とかのある艱難辛苦のこの土地で、よくやってきたと思います。

ですから、これからは、グローバル化して、世

界は普遍的になっていく中で、自分たちの個性は失わないで、地方は地方の良さを、その独特の芸術や独特の思索、もうここしかないっていうようなことをやってもらいたいですね。

アメリカのアспенという町には、昔銀山があり、人口は5千人位しかいないにもかかわらず、3万人くらい収容できるホテルや施設があります。オリンピックをそこに誘致しようとした時に、「俺達嫌だ」と断った町なのだけど、それぐらいに絵描きと同じような個性をもった地方の都市づくりをして頂きたいと思います。

▶**神田** 先生が私のメンターの一人で大変お世話になってきた武藤敏郎オリ・パラ委事務総長と対談された際、先生は「人間の創造とはレガシーの積み重ね、その中に花が咲く。命をつないでいきたいという強いエネルギーが美しい花を作る」と非常に含蓄のある話をされています。最後に、人類の歴史の連続と創造の関係についてご教示ください。

▷**絹谷** 人類は、どんな昔でも、常に進取の気性をもって、新しいチャレンジ、イノベーションを、精力的にやってきました。その結果、中近東などではいろいろなことが起こっているものの、大勢の人があまり傷つかないで、人生を全うできるような世界に進歩してきていると思います。例えば、江戸時代に人口が爆発的に増えたのに、産業が追いつかなかったため、口減らしということが起こりました。姥捨て山もそうだと思います。人類はこういったことを克服してきたのです。そのためには、今、いいところに安住していないで、大木になるかどうかはわからないけれど、とにかく種を蒔くことですね。小さければ、多少リスクを負っても、あまり被害が甚大ではないので、また色々なことにチャレンジできるわけで、そういう小回り部隊にも、十分肥料を与えていただくと、どこかで、大木として育つ木もあると思います。絵についても同じで、小さな種を蒔いていただければ、思いもかけない発想とか、その時は「何だこれは、こんなのは絵じゃないよ」と言

われていても、時代が動いていけば、時代がそっちの方についていくということもあるのです。この大きな歴史の流れの中で、東洋人は稲作民族なので、同じところを回っていても米ができるということもあって、少々怠惰になる危険があります。他方、狩猟民族はどこかへ行って、魚を捕らなければ、何かしなくては生きていけないということがあります。我々、東洋人の方が、進取の気性の大切さを意識して新しいことに挑戦していかなければいけないと思います。

▶**神田** 本日は、大変、多岐にわたり、貴重なお話を拝聴させて頂き、誠に有難うございました。
(この対談は2017年3月24日に収録された。)

本シリーズバックナンバー

年	月号	有識者	肩書き
23	4	濱田純一	東京大学総長 (国立大学協会会長)
		野依良治	理化学研究所理事長 (ノーベル化学賞)
	5	清家篤	慶應義塾塾長 (日本私立大学連盟会長)
		山中伸哉	京都大学教授 (京都大学IPS細胞研究所長、後にノーベル生理学・医学賞)
	6	藤原和博	東京学芸大学客員教授 (大阪府知事特別顧問)
	7	宮田亮平	東京藝術大学学長 (金工作家) (後に文化庁長官)
	8	白石隆	政策研究大学院大学学長 (後に文化功労者)
		中村紘子	ピアニスト (後に旭日中綬章)
	9	福田富昭	日本オリンピック委員会副会長 (日本レスリング協会会長)
		苅谷剛彦	オックスフォード大学教授
		三村明夫	新日本製鐵会長 (前日本経団連副会長、後に日本商工会議所会頭)
	小林誠	日本学術振興会学術システム研究センター所長 (ノーベル物理学賞)	
	三遊亭円楽	落語家	
24	5	鎌田薫	早稲田大学総長 (法科大学院協会理事長)
	6	葛西敬之	JR東海代表取締役会長 (後に旭日大綬章)
	7	陰山英男	大阪府教育委員会委員長 (立命館大学教授)
	8	毛利衛	日本科学未来館館長 (宇宙飛行士)
	9	大沼淳	文化学園理事長 (日本私立大学協会会長)
	10	松本紘	京都大学総長 (後に国立大学協会会長、理化学研究所理事長)
	11	山下泰裕	東海大学副学長 (オリンピック金メダリスト)
	6	秋元康	作詞家 (AKB48総合プロデューサー)
	7	山岸憲司	日本弁護士連合会会長
	8	山見進	東北大学総長 (後に国立大学協会会長)
	9	岡素之	住友商事相談役 (規制改革会議議長)
10	田村哲夫	渋谷教育学園理事長 (日本ユネスコ国内委員会会長)	
11	湖木守一	名古屋大学名誉教授 (元日本教育社会学会会長)	
12	松本幸四郎	歌舞伎俳優 (文化功労者)	
26	1	緒方貞子	元国連難民高等弁務官 (前国際協力機構理事長、文化勲章)
	3	濱口道成	名古屋大学総長 (国立大学協会副会長)
	4	茂木七左衛門	日本芸術文化振興会理事長 (元キックマン副会長)
	5	飯吉厚夫	中部大学理事長兼総長 (核融合科学研究所初代所長)
	6	坂根正弘	コマツ相談役 (元日本経済団体連合会副会長)
	7	谷口功	熊本大学学長 (国立大学協会副会長)
	8	佐藤勝彦	自然科学研究機構機構長 (東京大学名誉教授、後に文化功労者)
	9	村井純	慶應義塾大学環境情報学部長・教授 (「インターネットの殿堂」入り)
	10	長谷川閑史	武田薬品工業会長 (経済同友会代表幹事)
	11	利根川進	理化学研究所 脳科学総合研究センター長 (ノーベル生理学・医学賞)
	12	弘兼憲史	漫画家

年	月号	有識者	肩書き	
27	1	川村隆	日立製作所相談役 (前日本経済団体連合会副会長)	
	2	黒田壽二	金沢工業大学総長 (日本私立大学協会副会長)	
	3	牧阿佐美	新国立劇場バレエ研修所長 (元新国立劇場舞踊芸術監督、文化功労者)	
	4	荒木光弥	国際協力ジャーナル社会長・主筆	
	10	五神真	東京大学 総長	
	11	谷村新司	音楽家 (東京音楽大学客員教授 / 上海音楽学院名誉教授)	
	12	小林喜光	三菱ケミカルホールディングス 取締役会長 (経済同友会 代表幹事)	
	28	1	天野郁夫	東京大学名誉教授 (元東京大学教育学部長)
		2	奥正之	三井住友フィナンシャルグループ取締役会長 (元全国銀行協会会長)
		3	半藤一利	作家
		4	斉藤惇	KKRジャパン会長 (元日本取引所グループCEO、後に旭日大綬章)
		5	本庶佑	先端医療振興財団理事長 (文化勲章)
6		大西隆	日本学術会議会長 (豊橋技術科学大学学長)	
7		池井戸潤	作家	
8		山極壽一	京都大学総長	
9		天野浩	名古屋大学教授 (ノーベル物理学賞)	
10		高田創	みずほ総合研究所 常務執行役員 調査本部長	
		河野龍太郎	BNPパリバ証券 経済調査本部長	
	熊谷亮丸	大和総研 執行役員 調査本部副本部長		
11	三谷太一郎	東京大学名誉教授 (文化勲章)		
12	橋・フクシマ・坂江	G&S Global Advisors 社長 (元経済同友会副代表幹事)		
29	1	デービッド・アトキンソン	小西美術工芸社社長 (元 ゴールドマンサックス パートナー)	
	2	小宮山宏	三菱総合研究所 理事長 (東京大学第28代総長)	
	3	羽生善治	棋士 (三冠) (王位・王座・棋聖)	
	4	梶田隆章	東京大学宇宙線研究所 所長 (ノーベル物理学賞)	
	5	内村航平	体操競技選手 (オリンピック 金メダリスト)	